美しく楽しく価値のあるくらしを創るために

生活文化ルネッサンスへの提言

生活文化フォーラム

昭和61年5月

なぜ、いまルネッサンスか

かつてヨーロッパを席捲した文芸の一大ムーブメント、文芸復興(ルネッサンス)の一語が、いまなお私たちの口をついて出るのは、このことばが深いロマンを秘めているからです。ルネッサンスの素晴らしさ、その真髄はどこにあったのでしょうか。

それは絵画、彫刻、建築、家具、工芸、服飾から文学にいたるまで、文芸の名で包括される創造的な営みのすべての分野がおたがいに影響しあい、輻湊しあい、こぞって壮大な文化変容をなしとげたことにありました。ルネッサンスの一語のもつ魅惑は、そのムーブメントによって時代の風景全体が刷新され、精神が活き活きと解放された、その時代変容の統合性(トータリティー)にあったのです。

時を同じくして日本では安土桃山の文化が花ひらきました。建築絵画の壮麗、衣裳の華美、茶の道の静寂、みやびとわびの織りなす感性の時代がひらかれたのです。自由都市堺の繁栄、南蛮文化への熱中、洛中洛外の賑わいは、まさに日本版ルネッサンスでした。山崎の妙喜庵にはじまり醍醐の花見でしめくくられた桃山ルネッサンスは、きたるべき世紀のためにトータルな生活文化の再編成を、見事になしとげたのでした。

文芸復興を受け継いで地球文明のあらたな展開の突破口をひらいたのは産業革命です。そして二世紀余、このたくましい歳月は科学技術の人間生活への可能性の飽くなき試行についやされました。とくに、今世紀の後半は、産業にあってはコンピュータによる個性と感性の多様性に対応しうる生産・流通の変革を可能にし、社会生活にあっては交通・通信の飛躍的発展、そして家族生活の場面では家庭電化からそれの電子化へと、科学技術の可能性の、個の生活と都市への活用を試みる時代となりました。

いま、時代はまさに生活創造にかかわるあらゆる分野での試行がほぼ出そろった状況にあります。それぞれの可能性をたがいに活かしあって、統合的な新しい生活景観、精神の風土を創りあげていける、生活文化ルネッサンス前夜なのです。

個別の分野でひらかれた高度な可能性も、生活文化の望ましいあ

り方、という観点からみれば理不尽であったり、過剰であったり、不調和の部分が多々見られることも否めません。20世紀がつくりあげた成果を、トータルに活かし、21世紀に美しく、楽しく、価値のある生活文化を創りあげていくには、生活創造のかかわるあらゆる分野がおたがいに影響を与えあい、調整しあって相乗効果を生んでゆかねばなりません。

20世紀の生み出した諸成果はいま混沌として坩堝のなかに満ち満ちています。ここに効果的な触媒を投げこめば、それらが激しい相互反応によってトータルな生活文化の新しい結晶が析出するにちがいありません。時あたかも新しい世紀を目前に、みんながわくわくとして、きたるべき世紀のために何かをしたいと心を踊らせています。トータルな生活文化の変革をみちびくキーワードを投げこむ千載一遇の好機です。

生活文化ルネッサンスを提唱するゆえんです。

	石井　幹子	照明デザイナー
	石毛　直道	国立民族学博物館助教授
	榮久庵憲司	インダストリアル・デザイナー
(代表)	加藤　秀俊	放送大学教授
	菊竹　清訓	建築家
	公文　俊平	東京大学教授
	小松　左京	作家
	樋口　敬二	名古屋大学教授

(アイウエオ順)

あらためて生活の質の向上を

いま、日本はあらためて生活の質(クオリティ・オブ・ライフ)について真剣に考えるべき時期を迎えているように思われます。とくに、経済面では対外的発展よりも国内的充実により力を注ぐことが強く求められはじめました。生活そのものに目を向けると、衣、食、住のアンバランスがあるにしても、情報化・行動化の進展、余暇の増大、長寿化の進行、女性の社会的進出などの状況が、いわゆる高度大衆消費社会の段階をこえて新しいライフ・スタイルを求め、生活の質の高度化を図ろうとする気運を強くうながしています。

衣、食、住をはじめとして保健、学習、鑑賞、創作などの物心両面にわたる新しいライフ・スタイルの創造を生活文化の再発見と呼ぶこともできるでしょう。いま、生活文化は、それぞれの地域社会の風土、伝統、歴史などに根ざした個性をもちながら、世界史上空前の国際化の波のなかで相互に活発に交流しはじめました。日常の生活文化は一国の風格の源泉であります。生活文化の面での成功を通して「風格のある日本」を形成することがこんにちの日本の課題になっています。

近代化をこえて日本の独自性を

明治以来の日本の生活文化の変化をかえりみると、近代化、すなわち欧米追随型の「西欧化」が基調となり、機能性あるいは効率が重視されてきていたようです。いまや、そうした近代化の域をこえて独自の未来への道を進むことが求められつつあるように思われます。これが日本だけの問題ではないことは、世界の諸社会がそれぞれの文化的アイデンティティーを確立し、生活文化のイメージを再構築するという競争がはじまっていることに、よくうかがわれます。

日本人は、針供養、筆供養などにみられるように、物質世界にたいして機能性をこえた思い入れをもち、また、物を持ち、とり合わせ、使うことを通じて精神を充実させてゆくという伝統を持ってき

ました。その根底にあるのは鋭い感性と深い情緒でした。日本は、むかしから、この特性を基本に、ひろく世界の生活文化の諸要素を選択的にとりいれながら独自の生活文化を形成してきました。いま、日本は、現代的時点で、感性と情緒の復興を契機として、みずからと世界文明の達成してきた諸成果をトータルに活用することによって新しい生活景観と精神の風土を創りあげ、その評価を世界に問いかけることを求められているように思われます。

現代日本では、ひとりひとりの生活者がひろい選択の機会を生かして、美しく楽しく価値のあるくらしとそのための環境を創造し、生きがいを発見する時代を迎えているともいえましょう。こうした日本人の精神的エネルギーの発散のうごきを生活文化のルネッサンスと呼ぶこともできましょう。

ゆとりのある価値観

生活文化のルネッサンスを支える価値観の特色は、幅の広いゆとりであります。技術の進歩の成果を積極的に生活にとりいれてゆくという姿勢は必要不可欠ですし、近代化の過程で培われた効率的なシステムづくりの能力や日本の中小企業群がもつきめのこまかいクオリティの高さはこれからも大切にしなければなりません。

海外の文物に対する関心も国際化のひろがりにつれてますます高まることになりましょう。生活のなかに価値のあるもの、風格のあるものを創ってゆくには、世界の価値あるものを自らのふところに引き入れることが必要です。ゆとりは教養から生まれます。世界の生活文化、伝統文化にひろく触れ、その豊かさを鑑賞するチャンスをふやすことが大切です。

世界に触れることによって伝統を再評価することができます。単純な空間を生活者の知恵で多様に使いこなしたり、季節に応じて道具を出し入れして使い分けたり、変わってゆくものや古びてゆくも

のに価値を認めたり、部分よりも全体としてのありかたを重んじるといったことに代表される「型」、「風(ふう)」、「道」といった日本固有の精神的価値を再認識することも重要ではないでしょうか。さらに、伝統工芸については、これを支える地域と人を含めた総合的な価値を尊重し、それを新しい日常生活のなかに生かし、展開してゆくことが急務であると思われます。

また、変化の豊かな気候風土も日本の生活文化を規定する重要な条件であり、四季をたのしみ、また雪国の特性を積極的にとらえなおす工夫なども大切でありましょう。そうした努力の成果が必ずや世界のさまざまな地域で高く評価され、受け入れられるであろうことも、ここであらためて強調しておきたいと思います。

まさに、古今東西の諸文化の要素を共存させ、組み合わせ、総合するという作業にこそあたらしい日本の活路と将来が約束されているのではないでしょうか。

デザインの意義、ファッションの役割

生活文化のルネッサンスの核はひろい意味のデザインであります。デザインは、機能性と感性の総合あるいは用と美の調和として、美しく楽しく価値のあるくらしを創るための基礎となるものであり、その重要性はますます大きくなることが予想されます。

生活文化のルネッサンスとは「21世紀の生活文化をデザインしよう」ということと同義なのです。20世紀がひらいたさまざまな可能性をもって生活文化をトータルに再編成し、諸々の可能性に適切な位置を与えていくところにデザインの大きな意義があります。その背景にあるのは、太古から培われてきた、形に表現される心を問い直すことであり、美の魂を問い直すことです。

とくに最近ではファッションデザインのジャンルがはなやかさを増しています。衣装を中心とするファッションデザインは、建築、住

まい、インテリア、インダストリアルデザインをはじめとして食品やその包装など、その周辺に大きな影響を与えはじめています。生活文化ルネッサンスのロマンには、豊かな高い品位のファッション世界に彩られてゆく明日への期待もこめられています。デザインが生活文化を構造化し、ファッションがそれに彩りを与えていく役割を担っているのです。その意味で、現代の日本人は、それぞれの形で芸術活動に参加しているといってさしつかえありません。

ときどきの時代感覚を彩り、多様な感性に呼応し、つねに精神を活性化し、ものの風景を新鮮化してゆくファッションは人間性の世紀、21世紀の基幹となるデザインジャンルのひとつとなると思われます。こんにちファッション化現象は力強い胎動を起こしているといえるでしょう。生活文化のルネッサンスはまずファッションデザインに兆したのであり、ここを起点に生活文化の統合的なデザインは起こされてゆくのです。

若者、女性、高齢者、家庭、地域の役割

生活文化のルネッサンスの旗手は若者と女性でありましょう。とくに女性の役割はきわめて大きいと思われます。日本の生活文化は、もともと女性に担われている部分が大きかったことはあらためていうまでもありません。あわせて、人口の高齢化にともない、文化の質について豊かな経験と深い見識をもつ高齢者が果たすべき役割と、その潜在的エネルギーも、生活文化の高度な成熟のためには見のがしてはなりません。人間のおおきな歴史と人生の価値とを結びつけるのは高齢者の役割です。

生活文化の基本単位は家庭であり、これからの生活文化も家庭生活とその延長線上で展開されるものです。しかし、現代以後の住様式は都市型社会であり、それゆえにこそ都市における生活環境の再構築が必要になり、またコミュニティーのあり方、小単位集団、二

次集団の形態やあり方が問いなおされていかねばなりません。

地域社会についていうならば、日本の地域社会の文化は江戸時代まで健在でありました。そこにもこんごの生活文化の潜在的活力が眠っているはずです。これを再活性化することも可能でありましょう。また、いまはそれぞれの地域社会がみずから世界と結ばれていく時代でもあります。そうした刺激によって生活文化のルネッサンスを加速してゆくことが期待できると確信します。

提案と選択、市民文化と企業文化

生活文化のルネッサンスをもたらす決定的な鍵は生活者の手中にあります。新しいライフ・スタイルは、供給側からの活き活きとした提案を、生活者が自らのイメージにしたがって選択し、創造的な組み合わせをたのしむことによって生み出されるものが多いのです。生活文化はまさに人間の精神の交流のなかからうまれるものであり、日本人の精神文化のなかにある共通の価値観が日本の生活文化を成り立たせているといってよろしいでしょう。

この点で重要な役割を果たすのが情報であります。高度情報化社会の目標はひとりひとりの人間の生活の質をそれぞれの年齢・階層別に最大に高め、最大の精神的満足をもたらすことに求められるべきである以上、ハイ・テクはハイ・タッチのためにあると考えるべきです。ニューメディアは、生活者と供給側の提案と選択をめぐる対話を双方向化し、活発化するためにこそ積極的に活用されるべきだと考えます。

また、生活文化をめぐるイベントは、生活者と供給側の出会いの場として、たしかなイメージ、精神、思考方法を基礎にして、双方が深く満足するような心の触れ合いを求めるものでなければなりますまい。双方の採算と満足はそこからおのずから生まれてくるはずです。

べつなことばでいえば、これからの生活文化は、いわば市民文化と企業文化の対話と交流のなかから創り出される性質のものであります。そこには比較生産費原理をこえた価値評価による産業の存立と発展の基礎が潜んでいます。美しく楽しく価値のあるくらしを創るために真に有効な貢献をできるかどうかによってこれからの企業や産業に対する評価も左右されることになるでしょう。また、生活者にとっては、生活のなかでの教養は、人間的深みのある交流の場であり、人間的了解を形成し、世代と世代をつなぐものであり、生活文化の源泉であることも忘れてはなりません。

そうした認識のうえに立って、生活者にも、供給側にも、美しく楽しく価値のあるくらしを目指そうという意識がひろがり、生活文化のルネッサンスをめぐる活動が全国土で活発化し、「風格のある日本」が形成されてゆくことを念じてやみません。21世紀初頭までの20年間がこの実現のための日本の新しい挑戦の初期段階であると確信します。

以上

㈱　生活文化フォーラムは、通商産業省生活産業局の要請をうけて、これからの生活文化の方向について自由に論議し、提案し、さらには生活文化に関心をもつ人々とひろく対話を重ねるために、加藤秀俊を代表として発足したものです。今後、その活動の充実につれてメンバーならびに各地域フォーラムをさらに拡大し、輪をひろげてゆくことにする予定です。

なお、今回の提言をとりまとめるに当たっては、次に記す企業の協賛をいただきました。

樫山㈱
㈱資生堂
ジャスコ㈱
㈱鈴乃屋
㈱鈴屋
㈱西武百貨店
㈱第一勧業銀行
㈱東急エージェンシー
㈱レナウン
（アイウエオ順）

生活文化フォーラム・メンバー紹介

(アイウエオ順)

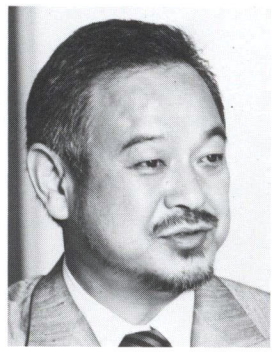
石井 幹子（いしい もとこ）

東京芸術大学美術学部卒業
現在 照明デザイナー
石井幹子デザイン事務所代表取締役
1986年度 パン・パシフィック
照明エキスポジション国際委員長

[作品]万国博美術館・電力館
沖縄海洋博
科学万博シンボルタワー
レーザー

[著書]「環境照明のデザイン」
「光のデザイン」

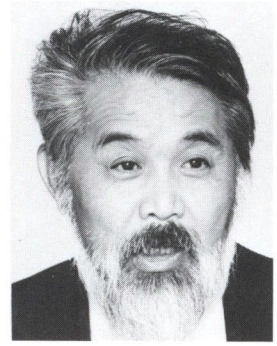
[受賞]米国、西ドイツ、日本から多数



石毛 直道（いしげ なおみち）

京都大学文学部史学科卒業
京都大学人文科学研究所助手、
甲南大学助教授を歴任
現在 国立民族学博物館助教授

[著書]「住居空間の人類学」
「食事の文明論」
その他



榮久庵 憲司（えくあん けんじ）

東京芸術大学図案科卒業
現在 インダストリアル・デザイナー
GKインダストリアルデザイン
研究所所長
国際インダストリアルデザイン
団体協議会(ICSID)名誉顧問

[著書]「道具考」
「インダストリアル・デザイン」
「幕の内弁当の美学」
「道具の思想」
その他

加藤 秀俊（かとう ひでとし）(代表)

一橋大学大学院修了
京都大学助教授
学習院大学教授等を歴任
現在 放送大学教授

[著書]「加藤秀俊著作集」
全12巻

菊竹 清訓（きくたけ きよのり）

早稲田大学理工学部建築学科卒業
現在 建築家
菊竹清訓建築設計事務所主宰

[作品]「出雲大社庁の舎」
「熊本県伝統工芸館」
「福岡市庁舎」
「京都コミュニティーバンク」
その他多数

[著書]「人間の環境」
「人間の建築」
「人間の都市」
その他

公文 俊平（くもん しゅんぺい）

インディアナ大学大学院修了
東京大学助手、講師、
助教授を歴任
現在 東京大学教授

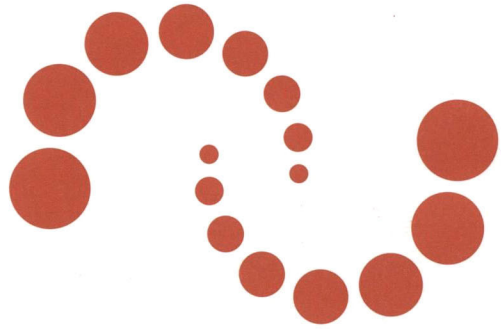
[著書・論文]
「転換期の世界」
「社会の進化について」
「文明としてのイエ社会」
「文化摩擦概念の社会システム論的定義の試み」
その他多数

小松 左京（こまつ さきょう）

京都大学文学部イタリア文学科卒業
現在 作家

[著書]「日本沈没」
「復活の日」
「未来の思想」
「地球社会学の構想」
その他多数

樋口 敬二（ひぐち けいじ）

北海道大学理学部卒業
北海道大学助手、講師、
助教授を歴任
現在 名古屋大学水圏科学
研究所所長

[著書]「地球からの発想」
「氷河への旅」
「雪と氷の世界から」
その他